

受 験 番 号				

座 席 番 号			

(試験開始の合図の後に記入)

成城中学校入学試験問題(第三回)

国 語

(配点一〇〇点)

令和六年二月五日 八時五〇分 — 九時四〇分

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子は全部で19ページあります。
- 3 解答には、必ず黒色えんぴつ(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 4 解答は、必ず解答用紙の指定の欄らんに記入しなさい。
- 5 問題冊子、解答用紙それぞれの指定の欄に、受験番号と座席番号を記入しなさい。
- 6 解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号などを記入してはいけません。また解答用紙の余白および裏面には、何も書いてはいけません。
- 7 文字数の指定のある問題は、句読点などの記号も一字に数えます。
- 8 問題冊子の余白は、下書きに使用してもかまいませんが、どのページも切り離はなしてはいけません。
- 9 問題冊子、解答用紙はどちらも持ち帰ってはいけません。試験終了後、必ず提出して下さい。

問題は次のページから始まります。

【一】 次の問いに答えなさい。

問1 次の――部について、漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。(ていねいにはつきりと書くこと)

- ① 快い春風が吹いた。
- ② 努力がトロウに終わる。
- ③ 原因をスイソクする。
- ④ 友人を家にマネく。
- ⑤ 経文をトナえる。

問2 次の①・②の□にあてはまる言葉として最も適当なものを、あとのア～オのうちからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 一時間待っても来ないのだから、□来るまい。
- ② この本を読み終えるまでは、□日付が変わっても寝ない。

- ア まるで イ たとえ ウ よもや エ めったに オ ぜひ

問3 次の①・②の□にあてはまる言葉として最も適当なものを、あとのア～エのうちからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 学級委員が□くれたおかげで、文化祭の準備は滞りなく進んだ。
- ② 提灯を持って イ 三味線を弾いて ウ 舌鼓をうって エ 音頭をとって

② 演劇が始まり、あたりは□ように静かになった。

- ア 根を張った イ 水を打った ウ 空を切った エ 尾を引いた

問4 次の①・②の言葉に最も近い意味を持つものを、あとのア～エのうちからそれぞれ選んだうえで、その□にあてはまる漢字一字を答えなさい。

① 石橋をたたいて渡る

- ア 出る杭は□たれる イ 木に□をつぐ ウ 転ばぬ□の杖 エ □らば大樹の陰

② 因果応報

- ア 我田引 □ イ 温故知 □ ウ 言語道 □ エ 自業自 □

問5 次の――部の言葉が直接かかっているのはどこか。最も適当なものをあとのア～オのうちから選び、記号で答えなさい。

母が帰って来てから一緒に車クルマでスーパーマーケットへ買い物に行く約束になっている。

- ア 車で イ スーパーマーケットへ ウ 買い物に エ 行く オ なっている

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【事実】

① 実際に起こった、または存する事柄。

② 特に、法律で、一定の法律効果の変更や消滅を生ずる原因となる事物の関係。

実際に起こったこと。それが事実である。ところが、ものごとが実際に起こったかどうかを判断するのは、なかなか難しい作業なのだ。わかりやすくするためにここで小説のワンシーンを使って考えてみましょう。

「その殺人犯が現場から立ち去るのを私はこの目ではっきりと見ました。彼はまるで血のような真っ赤な色のパーカーを着ていて、私はとても恐ろしく感じました」

登場人物がこう語るとき、これは事実なのだろうか。犯人が赤いパーカーを着ていたかどうかは捜査が進展していくに連れて判明するだろう。しかしながら、目撃者が実際に犯人を見たのかどうか、そのときに恐ろしいと感じたのかどうか、本当のことはわからないのだ。多くの研究結果から、人間は僕たちが考えている以上に、自分の記憶を都合良く変えていくものだとなっている。

子供のころに聞いた話がまるで実体験のように記憶されていたり、久しぶりに訪れた母校が思っていたものともまるで違っていたりする経験は多くのにあるだろう。《ア》

先ほどの証言をした目撃者は、たいして恐ろしいとは思っていなかったのに、見かけたのが殺人犯だったと聞かされたことで、あとから恐ろしいと感じたのかも知れない。人が刺されたと聞いたせいで、ちらりと目の端に入ったパーカーを、そういえばあれは血の色のようにだったなど考えたのかも知れません。

人間は、自分の望み通りに、自分が考えたいように記憶をどんどん変えていきます。殺人が起きたと知ると、彼／彼女の記憶は何らかの形で脚色されます。そして、脚色された記憶を何度も話すうちに、初めからそうであったように感じ始めるのです。

僕たちは自分の記憶を頼りにものごとを考えますから、改竄された記憶は、自分の過去の体験そのものです。その体験がはっきりと記憶に残っているわけですから疑いもしません。

実際に、大きな事件や事故に巻き込まれた人たちにインタビューをすればよくわかりますが、いくらその場に居合わせた当事者だからといっ

て、ものごとを正確に覚えているわけではありません。人によって言うことはさまざまで、**A** そのすべてが客観的な事実とは異なっていたなんて話はよくあることなのです。

交通事故の目撃者に車の色を尋ねると「青でした」「白でした」「黒でした」といろいろな回答が出てくるのですが、実はグレーだったなんて話もよくあります。

B、それは嘘なのででしょうか。目撃者の語った色は、事実とは異なっているものですが、本人の記憶にははっきりと残っているのです。勘違いや思い違いは嘘なのででしょうか？ 《イ イ》

車を運転していて、横からふらりと自転車が見れたとします。危機一髪でなんとかハンドルを切って「うわあつ、危なかったなあ」と口にするとき、本人は間違ひなく危なかったと思っっています。客観的に自転車の向きや速度を計算すれば、たいして危険はなかったかもしれません。

C 「危なかったんです」と言う人は、本当にそのように思っっています。事実ではないかもしれませんが、その感情は嘘なのででしょうか。

口には出さず、本人がただ心の中でそう思っっているだけの記憶までを嘘に含めれば、人は一日におよそ三千回の嘘をつくそうです。嘘です。二百回だそうです。それもまたその心理学者だけが思い込んでいる嘘かもしれませんが、とにかくそういう研究があるそうです。ちなみに、少なくとも二回は嘘をつくという研究もありますので、数について実際のところはよくわかりません。ですが、やはり嘘をつかない人はいないようですよ。《ウ ウ》

僕たちは自分の五感を使っつて世界を認識し、それを記憶として取り込んでいきます。ところが、その過去の記憶が新しい経験によつてどんどん改竄されているとしたら。あるいは思い違いや勘違いが、そのまま記憶として残つていくとしたらどうでしょう。事実なんてものは存在するのでしょうか。

嘘とは何かを考えれば考えるほど、僕が自分で認識しているこの世界は、僕一人だけがそう思い込んでるものに思えてしかたがないのです。多くの人がそれぞれの世界で検証した結果、お互いの認識が一致するもの、それを事実と呼ぶのだとしたら、完全に客観的な事実なんてものは存在しません。《エ エ》

それでは、僕たちはその「事実」をどのように認識しているのだろうか。僕たちはあとから記憶を改竄して自分なりの「事実」をつくるだけでなく、**③** 実は最初から、実際に起こったことをそのまま認識してはいないのだ。

世界はあまりにも複雑すぎるから、たつた今日の前で起こっているできごとでさえ、僕たちにはそのすべてを把握し、理解することはできない。もしもすべてを把握しようとすれば、あつというまに脳のリソースを使い果たしてしまうに違ひない。

今この瞬間、あなたは自分の周りで起きているできごとをすべて記録できるだろうか。目に入るもの、聞こえる音、微かに感じる香り、しか

もそれらは一瞬一瞬変化しているのだ。とてもじゃないが、完全に把握することなどできない。

だから僕たちは現実の中にある膨大な「事実」の中から、必要な要素だけを選び取っていく。見たいものだけを視覚に流し込み、聞きたい音だけを聴覚に留める。とりあえず必要のないものは切り捨て、情報量を減らして脳の中へ収めていく。そうしなければ処理できないのだ。

この時点でそれはもう「事実」ではない。僕たちは事実をそれぞれのやり方で梳いてから自分の記憶に収めていくので、人によって「事実」は異なってくるのだ。後述しますが、僕はこの「それぞれに異なる事実」を「真実」だと呼ぶことにしています。だから「事実は一つだが、真実は人の数だけある」と言われるのである。

同じ場所において、同じものを見聞きしても、飛んでいた鳥の数を覚えている人もいれば、激しくなったクラクションの音を記憶している人もいる。そのどちらも覚えていない代わりに、その場で交わされた会話だけはすべて覚えているなんて人だっているかもしれない。

同じときに同じ場所にいた人たちの多くが同じ記憶を持っていれば、それは「事実」である可能性が高まる一方で、同じときにその人たちがうっかり見逃していたものは、その場に存在しなかったことになってしまう。それもまた実際に起こったことなのに、認識する者がいなければ「事実」から消えてしまうのだ。

ここで少しだけ目を瞑って、しばらく周りの音をよく聞いてみましょう。

どうですか。部屋の鳴り、冷蔵庫の空調音、ジジジと響く電球のノイズ、携帯電話の充電器が発する高周波、近所の人声、遠くを走るトラック。それまでまったく意識していなかった小さな音がたくさん聞こえてきたはずですよ。けれども、こうやって耳を澄ますまで、僕たちはその「事実」を消し去っていたのです。事実とはそれほど簡単に僕たちの感覚から零れ落ちるものなのです。

僕は長らくパラスポーツに関わってきたので、視覚や聴覚を使わずに生活している人たちともそれなりに交流がある。その日、夏のグラウンドに立った僕には、蟬の鳴く声が巨大なノイズの塊のように聞こえていた。ワシヤワシヤと空間全体を埋め尽くす音の中に、ときおりジージーだのミンミンだのといった個別の鳴き声が聞こえてくるのである。

ところが、視覚を使わない人は、どの方向の、どれくらいの距離の場所で蟬が鳴いているのかを、自分を中心にした球体にピンを打つように、それぞれの音源を感じ取っているのだと言う。さらに聴覚を使わない人は、空気の振動を感じると言うのだ。視覚を使わない人のように音源を把握することはできないし、僕のように塊の中に個体を感じることもないが、蟬の鳴き声はちゃんと把握できるらしい。

これこそは、僕たちが同じときに同じ場所においても使っている感覚器によって世界の捉え方が変わる好例だと思う。もちろん例として極端だけれども、視力のいい人と眼鏡が必要な人とは、世界を捉える解像度が変わると言われたら、ある程度は納得できるのではないだろうか。

〈浅生嶋『ぼくらは嘘でつながっている。』(ダイヤモンド社)による。ただし原文の一部を変更した。〉

問1 ——— ①「ものごとが実際に起こったかどうかを判断するのは、なかなか難しい作業なのだ」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア その場の状況やあとから聞いた情報に応じて作り変えられた記憶を頼りに、物事を判断しないといけないから。

イ 各々が自分を擁護するために述べる偽りの証言をもとにして、物事を判断せざるを得ないから。

ウ 周囲の人の多様な見方に配慮し、それらを集約する形でしか物事を正確に捉えることはできないから。

エ 自分の感情を抑えて冷静にできごとの細部に気を配らなければ、物事を正確に捉えられないから。

問2 本文には次の一文が抜けている。この文を補うのに最も適当な場所を本文中の《ア》《イ》《エ》のうちから選び、記号で答えなさい。

そこにあるのは、ただ多くの人が認めている、一つの仮説に過ぎないのです。

問3

A	く	C
---	---	---

 にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア A…そのうえ B…つまり C…なぜなら

イ A…しかも B…では C…けれども

ウ A…なぜなら B…けれども C…だから

エ A…かえって B…では C…つまり

問4 ——— ②「事実ではないかもしれませんが、その感情は嘘なのでしょうか」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 同じ経験をしたとしても人々が抱く感情は千差万別であり、本当に同じできごとを経験したのかと思われるほどだということ。

イ 実態の通りに認識できたかどうかにかかわらず、その結果生じた感情が当人の心の中に存在すること自体は否定できないということ。

ウ 多くの人から嘘だと言われていたことが、その後の研究の成果により客観的な事実だと認められることは往々にあるということ。

エ 些細なできごとなのに大げさに感情を表わされてしまうと、そのとき表出された感情を人は疑わしく思ってしまうということ。

問5 ——— ③ 「実は最初から、実際に起こったことをそのまま認識してはいないのだ」について、以下の問いに答えなさい。

(1) 人は「実際に起こったこと」をどのように認識しているか。それを説明した次の一文の [] にあてはまる言葉を、ここよりあとの本文中から十五字で抜き出して答えなさい。

「実際に起こったこと」の中から、 [] ことで認識している。

(2) 人が(1)のような認識方法をとるのはなぜか。それを説明した次の一文の [] にあてはまる言葉を、二十字以上三十字以内で答えなさい。

世界が複雑すぎて、 [] 。

問6 ——— ④ 「事実とはそれほど簡単に僕たちの感覚から零れ落ちるものなのです」とあるが、「事実」が「僕たちの感覚から零れ落ちる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 実際に起きたできごとでも、それを認識していないと存在しないものになってしまうということ。

イ 少し前に経験したできごとでも、日々の雑事に気を取られるあまりうっかり忘れてしまうということ。

ウ 身の回りで起きているできごとでも、多くの人がそれを認識しないと無かったことにされてしまうということ。

エ 視覚を通じて認識できているできごとでも、聴覚からの認識を優先すると事実と認めにくくなってしまうということ。

問7 本文の内容と表現に関する説明として**適当でないもの**を次のア～オのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

ア …… I 「これは事実なのだろうか」と疑問を提示し、 …… II 「本当のことはわからないのだ」と自分の考えを述べることで、論を展開している。

イ …… III 「感じたのかも知れない」、 …… IV 「考えたのかも知れませんが」という断言を避ける表現を重ねるところに、自分の考えを読者に押しつけまいとする筆者の気づかいが感じられる。

ウ …… V 「それもまたその心理学者だけが思い込んでいる嘘かもしれない」は、人の認識は曖昧なものであるという筆者の考えに基

づいている。

エ …… VI 「事實は一つだが、眞實は人の数だけある」は、同じできごと一つとっても、その認識は人によって異なることを表している。

オ …… VII 「僕は長らくパラスポーツに関わってきた」とあるが、これ以降の部分では、視覚や聴覚に障がいのある人のほうが、そうでない人よりも世界を好意的に捉えているということが示されている。

問8 ——— ⑤ 「世界の捉え方が変わる」とあるが、これについてより一層理解を深めたいと思つた中学生の健児君は、先生に頼み、本文の続きを読ませてもらった。以下はその本文〔資料〕と、それに対する健児君と先生との【対話】である。これを読み、あとの問いに答えなさい。

【資料】

同じ黒い色を見ても多くの人は「黒」と圧縮してインプリントすることしかできない。そこから再現できるのは「あれは黒かった」という眞実だけだ。けれども色についての知識があれば、そのときに見た黒は、いつたいどんな黒だったかを自分の中に明確に残すことができる。

鉄黒、黒椽、濡鳥、濡羽、暗黒、消炭、黝色、漆黒、紫黒、烏羽、墨色、呂色。これらはすべてそれぞれ異なる黒を表す言葉だ。現実に見た「濡鳥だった」と「鉄黒だった」と「墨色だった」はまるで異なっているのに、知識がなければ僕たちは「黒かった」という一つの単語に押し込んでしまう。

暗黒だったのか漆黒だったのか、そのわずかな違いを知っているだけで、僕たちの体験は何倍も豊かになっていくのである。

散歩をしているときに見かけた雑草も夜空にちりばめられた光も、草花や星の名前を知っているかどうかで現実の捉え方、体験が変わってくる。

優れた本を読めば、それまで知らなかった人の体験や感情だつて知ることができる。

知識を得るのは望遠鏡を手にするようなものだ。それまででは遠くにあつて見えなかったものや気づけなかったものが、はつきり見えるようになるのだ。

勉強のための勉強は楽しくないかも知れないが、ものを知るたびに世界の解像度がどんどん高くなっていくのを実際に体験すれば、もっともつといういろいろなことが知りたくなるはずだ。だから勉強つて楽しいんですよ。

【対話】

健児 へー、身のまわりの「黒」にそんなにたくさん種類があるなんて、今まで全く気づきませんでした……。

先生 そうだね。この【資料】の色の話は、本文と同じように、たとえ私たちが皆で同じものを見ていても、人によってその捉え方は違うと
いうことを教えてくれるね。この違いは何によって生じると【資料】には書いてあるかな？

健児 えーっと、勉強をして X が身につくことによって生じるということですか？

先生 その通り！ そうすると、勉強すれば「世界の捉え方が変わる」と筆者が言っていることの意味が見えてこないかな。

健児 なるほど。ただ X を身につけるだけで終わるのではなく、 Y ということですね。先生、今日はありがとうございました。
います。とても勉強になりました。

(1) X にあてはまる言葉を、【資料】から抜き出して答えなさい。

(2) Y にあてはまる言葉として、最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 学んだことをどうやって実生活に活かすことができるか考えていく

イ 自分の将来を見据えて、自ら主体的に学びに向かう姿勢を養っていく

ウ それまでになかった新しい視点を獲得し、自分の体験を豊かにしていく

エ 微妙な言葉の意味の違いにも注目していいねいな見直しを心がけていく

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学三年の秋、ぼくは両親と冷戦状態に陥った。

進学に関しての意見の食い違いだ。

ぼくが志望届を出した高校について、父さんはこう言った。「サラリーマンの息子が商業高校に行つてどうする」

じつは「商業」はどうでもよかったのだ。大切なのは「野球」。その高校は甲子園の常連の強豪校だった。

「奏太の好きなように生きなさい」といつも言っている母さんも難色を示した。「わざわざ偏差値がずつと下のところへ行かなくてもいいと思うの」

その時の野球部の顧問だった英語教師は勉強にもきびしい人で、「成績が下がったやつは試合に出さない」と宣言していた。だからぼくら野球部員は練習の合間に必死で勉強した。おかげでぼくの成績はどんどん上がつて、三年生になった時には、偏差値つてのがクラスでもトップクラスになってしまったんだ。まったく一生の不覚だよ。

じいちゃんだけはわかつてくれると信じて、思いをぶちまけたのは、じいちゃんが寝ている仏間だった。この頃には、じいちゃんは野球の練習どころか、庭にもめつたに出なくなつていた。いちじくの枝も伸び放題だ。

じいちゃんなら賛成してくれると思つた。でも、じいちゃんの言葉はいつになく歯切れが悪かつた。ぼくが野球馬鹿になつてしまったのは、じいちゃんのせい。家族にそう見なされて肩身が狭かつたからだろうか。もう字もちゃんと読めないのに『高齢者起業セミナー』なんてどころに参加申し込みをしたのが父さんにバレて、自分も猛反対されたばかりだったからか。

「あのな、奏太、好きなことと、うまくいくことは、別なんだ」

② 「なにそれ」いまさらなに言つてるのさ。

「野球の話じゃない」

「なんの話さ」

「人生の話だ」

あの日も俺は、パイナップル畑に出ていた。

昭和二十年の五月だった。台湾じゃパイナップルの収穫時期だ。

そこに突然空襲警報が鳴り響いたんだ。空襲警報のことは前に話したな。「来る来る」と言うが実際には来ない。いつも騙されるから、俺た

ちは縮めて「空報」って馬鹿にしていた。

なにしろその日も空は青かった。台湾の夏の空の色はそりやあもう、宝石を溶かして塗ったみたいに青いんだ。雲は白く、そして土は赤かった。こんなところで殺し合いなんて起きるわけがない。他の連中は逃げたが、俺はパイナップルをもぎ続けていた。

だが、今度の空襲警報は本物だった。

市街地の方角に煙が上がっているのが見えた。炎も上がった。イナゴの群れかと思うほどの数の爆撃機が飛んでいた。

そのうちの一機がこっちへ向かってきた。

爆撃機じゃなくて、護衛の戦闘機だ。戦闘機は始末に悪い。あいつらは建物を爆撃するんじゃない。機銃で地上にいる人間を狙い撃つんだ。兵隊かどうかなんて関係ない。空からは人間なんて蟻にしか見えないだろうからな。目についたそばから踏み潰すだけだ。

俺はパイナップル畑の中を走った。背の低いパイナップルの葉に体が隠れるように腰をかがめて。工場に戻ったらかえって危ないことはわかっていた。パイナップル畑の先にある森に逃げるつもりだった。

戦闘機は本当に撃ってきた。脱穀機みたいな音が背後に迫ってきた。俺はさらに腰を低くした。草履を履いた足や手や顔をパイナップルのぎざぎざの葉が打ち据えて切り刻んだ。きつと、いつも頭をもうでている人間への仕返しだろう。パイナップルの熟れた生首が次々に撃たれて、一面に甘酸っぱい匂いが漂った。

③ それでも空は青かった。

人間を笑ってるみたいに青かった。

森まであと少しの時、気づいたんだ。逃げおくれでパイナップルの蔭に隠れているもう一人に。

俺はその体の上に覆いかぶさった。俺より年下に見える女の子だったからだ。助けるのが男つてもんだろ。頭に赤い布を巻いた娘だった。俺は語り話のパイナップルの精ではないかと疑った。だが、違った。驚いてこっちに首を振り向かせたのは、李桃みたいに素晴らしく大きな目をした娘だった。

「それが、ばあちゃん？」

④ 写真の中のばあちゃんの目は、すももというより小豆だけど。

じいちゃんは立ち上がって、仏壇の扉を閉めた。

「違う」

俺たちはずっと抱き合っていた。娘は震えていた。体は温かかった。

あんな時なのに、あんな時だったからか、俺は鼻がくつききそうほど近くの子の顔を見つめ続けていた。娘は何か呟いていたが、最初は何を言っているのかわからなかった。収穫の手伝いに来ていたタイヤル族の娘だったんだ。

戦闘機が去ってから俺たちは磁石みたいに抱き合っていた。それからいきなり磁石の極がさかさまだったことに気づいたように、一瞬で離れた。

俺は野球部のチームメイトから習ったタイヤル語で「ロカハ・ス」と聞いた。後で知ったが、それは「お元気ですか」という意味だった。娘は学校には行っていたようで「だいじょうぶ」と日本語で答えた。

戦闘機がまた戻ってくるかもしれない。俺たちはそのまま森に身を隠すことにした。死にかけたというのに、俺はその子に夢中で話しかけ続けた。

「好きになったんだね」

じいちゃんとかんな話をするなんて。ぼくも成長したもんだ。

「まあ、なんていうかな」

じいちゃんは、甘酸っぱいものをほおぼっているような顔で口をつぐんでしまった。しばらく経ってから、突然言った。

「キャッチボールでもするか」

「だいじょうぶなの？」

「まだまだお前には負けない。そうだろ」

ぼくはじいちゃんのすつかり痩せた体を支えて答えた。「もちろん」

緑地公園になった河川敷は野球禁止だし、どっちにしるじいちゃんの足では遠くには行けそうもない。キャッチボールは家の前の道でやることにした。十メートルも離れていない場所に分かれて。じいちゃんとぼくが最初にキャッチボールをした時ぐらいの距離だ。

ボールはちゃんと円滑に行き来した。この九年でぼくは、じいちゃんのかまえてある場所にボールを投げるコントロールを身につけていたし、じいちゃんが投げるとんでもない荒れ球もたいていはキャッチできたからだ。そして途中からは、じいちゃんに気づかれないように少しずつ距離を縮めていった。おかげで昔みたいに会話のできる距離になった。

日本は戦争に負けたが、俺は台湾に残りたかった。その頃にはタイヤル族の娘と俺は、なんちゅうか、まあ、いい仲になっていたから。むこうもそれを望んでいた。

日本と台湾の立場は逆になったが、台湾の人たちは優しかった。治安も悪くなかったから、しばらくのあいだは国からも引揚げの話は出てこなかったしな。

でも翌年になるとそうもいかなかった。日本人がいつまでも台湾に残っていられる情勢じゃなくなってきたんだ。戦争が終わったのに、今度は台湾の中で内輪揉めが始まったんだ。俺一人で娘の暮らす村に隠れ住もうとまで思いつめていた時に、父親が死んだ。

勝手なことは言っていられなくなった。母親は病気がちだったし、二人の弟と三人の妹もいた。

日本に帰る日、俺は引揚げ船が出るまでずっとパイんと一緒にいた。パイんっていうのは、わかるか、そうだ。俺がつけたその娘のあだ名だ。出港間ぎわ、どうしても船に乗らなくてはならなくなった時、パイんが紙包みを俺に寄こしてきた。「お別れの贈りもの」そう言って。

「お別れじゃない。必ず迎えに来る」俺は結局嘘になる言葉を口にした。

俺の言葉が嘘になることを俺よりわかっていたはずなのに、パイんは笑って頷いた。

船の中で開いた紙包みの中身は、パイナップルでつくった焼き菓子だった。パイ？ そんなしやれたものじゃない。村で祝い事がある時に食べるという、あの子の手づくりの菓子だ。

俺はそれをずっと肌身離さず持っていた。船が日本に着くまで。身を寄せる親類の家までの道のりでも。パイナップルの匂いはずっと俺を包んでいた。腐らないうちにも思っても食えなかった。食ってしまったら、あの子との日々も消えてしまう。

じいちゃんはキャッチボールを始めた時から息切れをしていたから、こんなに長く喋ったはずはなく、この話にはぼくの想像がつけ加えられているに違いない。でも、相手の女の子をパイんと呼んでいたことも、二人が交わしたせりふの一言一句も、じいちゃんの言葉のままだ。この時のじいちゃんは正直だった。懺悔するみたいに。驚くほどロマンチックだった。

考えてみれば当たり前だ。じいちゃんも生まれつきじいちゃんだったわけじゃないし、ロマンチックに齡は関係ないのだから。

「菓子が石みたいに硬くなって、匂いもしなくなつてから、ようやく食った」

あるいは入れ歯の具合のせいかもしれないが、本当に口の中で噛みしめるようにじいちゃんは口をもごもごさせた。

⑦「あんなにうまくて、あんなに食いたくないものを食ったのは、後にも先にも初めてだった」

その言葉を最後にじいちゃんは黙りこんだ。もう話は終わり。少し喋り過ぎたって感じで。

だからぼくは話を振り出しに戻すことにした。

「で、ジョージ、俺はどうしたらいい」

「俺が言いたかったのは、好きなことが、うまくいくとはかぎらないってことだ。間違ってしまうこともある。失敗もある。それともうひとつ——」
そこでじいちゃんは咳き込んだ。ぼくが背中をさすると、寝ぼけた大型犬みたいに唸^{うな}ってから言葉を続けた。
「もうひとつ。自分のことは自分で決める。そうすれば、失敗はしても後悔^{こうかい}はしない」
じいちゃんがまた咳き込んだ。立っているのもつらそうだった。
それがじいちゃんとぼくの最後のキャッチボールになった。

〈荻原浩『それでも空は青い』（角川文庫）による〉

問1 —— ① 「まったく一生の不覚だよ」とあるが、何が「一生の不覚」だったのか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 良い成績をとるために勉強に専念するあまり、じいちゃんの体調の悪化を見過^{うな}ごしてしまったこと。
- イ 単に野球の試合に出るために勉強をしていたにもかかわらず、なまじ良い成績をとってしまったこと。
- ウ 顧問の先生に言われるがまま勉強してきたが、その先生が自分の両親に加担していたと気づけなかったこと。
- エ 文武両道を目指して必死に勉強してきたが、クラスで上位の成績をとったぐらいでは両親に認めてもらえなかったこと。

問2 —— ② 『なにそれ』いまさらなに言ってるのさ」とあるが、「ぼく」が「じいちゃん」に対してこのように思うのはなぜか。それを説明した次の一文の I・II にあてはまる言葉を、それぞれ十五字以内で答えなさい。ただし、I・II のどちらにも「野球」という語を用いること。

「ぼく」を I なのに、いまさら II を言っているように聞こえたから。

問3

③ 「それでも空は青かった。人間を笑つてみたいに青かった」とあるが、これは何を示そうとしている表現か。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 命を奪われかねない状況に恐怖する人間をあざ笑うかのように澄んだ空を描写することで、人間の営みがいかに愚かで無意味なものであるかを示そうとしている。

イ 絶体絶命の状況下にある「俺」に優しく微笑みかけるかのように晴れ渡った空を描写することで、人知を超えた自然の力に救われた「俺」の安心感を示そうとしている。

ウ 人間の横暴な振舞いを笑い飛ばすかのように刃え渡った空を描写することで、困難な状況でも諦めないという「俺」の前向きな気持ちを示そうとしている。

エ 人間の残酷さをただただ笑うしかないかのように広がった空を描写することで、人間の力の前ではいかに自然が無力であるかを示そうとしている。

問4

④ 「じいちゃんは立ち上がって、仏壇の扉を閉めた」とあるが、それはなぜだと考えられるか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 孫に向かつて偉そうに遠い昔の武勇伝を語ることを、仏壇の写真の中の妻に咎められるような気がしたから。

イ じいちゃんは初恋の少女の話をしていたのに、「ぼく」がそれをばあちゃんの話と勘違いしたことに腹を立てたから。

ウ 思い出話をしているうちに自分が過去に犯した過ちに気づき、過去を断ち切るためにそれを告白しようとしているから。

エ すでに亡くなっているとはいえ、妻の仏壇の扉を開けたまま、かつて自分が一目惚れした少女の話をするためにためらいを感じたから。

問5

⑤ 「俺は鼻がくつつきそうなほど近くの子の顔を見つめ続けていた」とあるが、「じいちゃん」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 命の危険が迫っている時だからこそ、少女の存在が一層愛おしく感じられた。

イ かつてない経験をした時だからこそ、傍にいる人とその経験を共有したくなった。

ウ 日常を逸脱した状況に陥っている時だからこそ、馴染みのある人と離れたくないと思った。

エ 過酷な状況に置かれている時だからこそ、パイナップルの精である娘にすがりたくなった。

問6 —— ⑥「途中からは、じいちゃんに気づかれぬように少しずつ距離を縮めていった」とあるが、それはなぜだと考えられるか。その

説明として適当なものを次のア～オのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

ア じいちゃんの荒れ球をキャッチし続けて疲れたくなかったから。

イ 少しでも長くじいちゃんと会話を続けていたかったから。

ウ じいちゃんのプライドを傷つけたくなかったから。

エ 成長した自分をじいちゃんに近くで見えてほしかったから。

オ じいちゃんとの会話を誰にも聞かれなくなかったから。

問7 —— ⑦「あんなにうまくて、あんなに食いたくない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちか

ら選び、記号で答えなさい。

ア パイナップルの菓子は苦楽をともしたパインをかけがえのない存在だと思わせる一方で、口にしたときに当時の恐ろしい経験も同時に蘇ってきたから。

イ パインの思いのこもった手作り菓子を口にできることはうれしく思う一方で、すでに石のように硬くなってしまった菓子を食べることは抵抗を感じたから。

ウ 菓子を食べたときに、日本に帰る自分を許してくれたパインの優しさが感じられる一方で、やはり自分は台湾に残るべきであったという後悔の念がこみ上げてきたから。

エ もらった焼き菓子を食べると、かつてパインと過ごした青春の日々が感慨深く思い出される一方で、そうした思い出が菓子とともに消え去ってしまうように思えたから。

問8 —— 「人生の話だ」とあるが、「じいちゃん」は「ぼく」にアドバイスとしてどのようなことを伝えたかったのか。それを説明した次の一文の

□にあてはまる言葉を、四十字以上五十字以内で答えなさい。

自分の話をするので、

□

を伝えたかった。



※文字はていねいにはっきりと書くこと

【一】

① 快	① ① こころよい	② トロウ	③ スイソク	④ マネク	⑤ トナえる
	徒勞	推測	招	唱	える

②×5

問 2
① ウ
② イ
①×2

問 3
① エ
② イ
①×2

問 4
① 記号
ウ
漢字
② 記号
エ
漢字
得
②×2

問 5
エ
②

【二】

問 1
ア
④

問 2
エ
④

問 3
イ
④

問 4
イ
④

問 5
① 必要な要素だけを選び取っていく
④

② 人間の脳のリソースではそのすべてを把握
⑤
⑤ することはいから
⑤

問 6
ア
④

問 7
イオ
③×2

問 8
① 知識
②
④ ウ

【三】

問 1
イ
④

問 2	Ⅱ 野球	Ⅰ 野球
	球を	馬鹿に
	あきら	めた
	めさせ	るよ
	うなこ	と

③×2

問 3
ア
④

問 4
エ
④

問 5
ア
④

問 6
イウ
③×2

問 7
エ
④

問 8	悔	自	好
	は	分	き
	し	の	な
	な	こ	こ
	い	と	が
	と	は	う
	い	自	ま
	う	分	く
	こ	で	い
	と	決	く
⑤		め	と
		れ	は
		ば	か
		、	ぎ
		失	ら
		敗	な
		し	い
		て	が
		も	、
		後	

/100

受験番号

座席番号